

立つてものを考える政治家の一人にすぎない。

シーアルツクのハマタリ同盟は、今秋より大規模な占拠行動を計画している。次回は権力の側もより強硬な態度が出てくることだろう。きびしいたにかいにないそう。

カーターにせよ、誰にせよ、今日は一人の政治家の

善意に期待する時代ではない。

運動の側の力量や質で政治家を動かすことはあつても、政治家が住民のために何かをしてくれるという状況でないことははっきりしている。

(日報へ公署を逃す。6月17日、掲載より抄出)
(自筆原稿、原稿カール・P・市民とネグロ・研究、提供)

占拠の思想

反原発運動における非暴力直接行動の展開

最近までの[＊]反原発運動は、周囲住民への教育宣伝と立法的な措置などの合法的な方法で表現されてきた。

ところが反原発運動のなかにあらわれた直接行動の使用は、全く新しい局面を展開することとなった。

いまアメリカのほとんどの人々は、シーアルツクの原発敷地の占拠についてはよく知っている。がそのような大衆的直接的行動が、すでに、すくなくともワケ所、すなわちスイスのカイゼルアウグスト、西独のヴィール、プロクドルフ、グロンドヘー、フランスのマールヴィール、ラペララン、イタリアのマンタルトなど一

で行われたことは知らないだろう。

これらの行動こそほとんどは八占拠[△]だつた。が、特に注目されるのは、その行動者規模がいつも千から三千人にも達していることである。

本稿で私は、ヨーロッパの反原発運動における八占拠行動の発展のあとを記述し、ついでアメリカにおける反原発運動の成り立ちにおけるそれと比較考察してみたい。

＊注
またデンマーク、ノルウェー、英、西独、日本、[△]フランス、スイス、イタリア、アイランド、スペイン、オーストラリア、ニュージーランドを指す。

それはラルザックにはじまった

南フランス・ラルザック地方の農民の軍用地化反対闘争は、原案問題が直接にふくまれてはいないが、互原発直接行動への最初の刺激と、大衆行動キャンペーンへの重要な示唆をもたらした。

一九七〇年フランス政府は軍用地拡張計画を発表した。がその地域の農民たちは直ちに反対し、全ヨーロッパの諸グループ・諸運動との連合と支持によつて、想像性ゆひかな抵抗キャンペーンを展開した。

それは当初の数年にわたる合法的抵抗にひきつづいて行われた、たとえば七三年六月十日にはじまる羊の放牧場の建設や、七四年十月五日、軍用地占拠のための百人の人々による劇的な移住を含むものだ。

ラルザックの斗争、占拠に示される直接行動はヨーロッパ全域における有名な事件となった。

ほとんど同時に、ドイツ国境に近いフランスのマルコルスハイムの約百人の農民は、製鉛工場用地の占拠をはじめた。その占拠行動は、10520マイルの地域に鉛をふくんだばい煙をまきちらす工場設置計画に反対して、数ヶ月の抗議行動の絶頂にあらわれた。

はじめ約百人の人達があらはれて、建設現場へやってきた。建設作業員が坑を打ちこもうとするのをすわ

り込んで妨害した。それからまもなくそこにテントを張り、小屋をつくり、占拠にはいつた。

彼らを守るため、毎日フランスアルザス地方の一つの村とドイツバーデン地方の一つの村が現地監視の責任を負うことになった。

もし警察が彼らの占拠を排除しようとするなら、彼らは携帯無線(トランシーブ)を通じて、村の連絡人に知らせ、たちまち警鐘がなり出す。そしてその地方全体で電話がなり、数千の人たちが、占拠者支援の行動に出るのである。

それは現地へかけつけるということだけではない。直ちに街頭へ出て、現地へ通ずる道路へ自動車や農耕機などを持ち出して、何百台とならべて道路封鎖をしたり、警察の行動の前後につきまとつて妨害する。

フランス政府はドイツ人が支援のため国境をこえてやってくるのをふせぐため国境閉鎖しようとした。それを先取りして人々は道路を完全に封鎖した結果政府は翌日にすべての人々に国境通過を許さねばならなかった。

占拠地にはキャンピングカーが何台も持ち込まれた。そこで飼うニワトリカゴや、小さなキャビン(小屋)そして大きな円形のへ友好の家も建った。携帯用発電機で電気をあとし、井戸も掘られた。こうして数カ

月後、ついに役人たちはあきらめ、建設は中止になったのだった。

これと同様に、原案用地での最初の占拠は、七三年暮におこった。その時は、四百人の人々がスイスのカイゼルアウグストの用地を、一時的にもせよ占拠したのである。

大衆的示威と直接行動

ヨーロッパおよび米国での原案反対の大衆的direct actionのキャンペーンが本格的に、かつ意識的にとられるようになったのは、西独のヴイル原案予定地での占拠だった。

ヴイル周辺の農民、学生その他の住民約二三百人が七五年二月十八日、予定地にむけて行進デモをした。来意した警察は放水したりして、農民たちが自分らを逮捕しろと抗議したにもか、わらず、青年たちだけを逮捕した。そして二日後に全部を追い払うまで、人々はその場所の占拠をやめなかったのである。

警察は、現地周囲に対戦車用の障壁や有刺鉄線をはりめぐらしたが、その翌日の金요일、五千人の人々が、用地をとりかこみ、その出入りの道路を封鎖した。さらに2月23日(日)には二万人が周囲をデモ行進

し、そのなかの数百人は背後地から接近して、塀や鉄線をとりはらい、再び原案敷地を占拠した。

数的にははるかに多い警察は、この二度目の占拠をやめさせることができなかった。

マルコスハイムの占拠と同様、Eにちにへ友好の家々が各地からくる支援者と交際のためにつくられ、建設着工はしないという決定ができた。七六年四月まで、その占拠はつづけられた。その後も七六年十一月までその用地は開放されて、ついに七七年三月十四日、ついに原案は設置しないという決定をかうとつたのである。

ヴイルにおけるねばりつよい占拠の成功は、カイゼルアウグストの二回目の占拠のひきがねとなった。またあとにつづくマルヴァイル・シーブルック、ブロックドルフなどにおける占拠を誘発し、その行動を鼓舞し勇気づけるものとなったのだった。

マルヴァイルでの最初の占拠は、二万名の人々による原案用地へ行進とフェスティバルから生れたものだった。

組織的な十分な討議によつて非暴力直接行動の準備がされたのち、原案用地のフェンスが破られた。用地に最初にはいつた者が、予定のように逮捕された。その釈放を求めて代表が交渉しているうちに

警官隊は催涙ガスを打ちはじめた。それに対応して五百人のデモ隊が用地内へと入りこんだ。交渉がふたたびはじまった。フェスティバルの車中が、お祭り気分のままとりまいて歌ったり踊ったり、騒ぎがはじまった。二日と三日に多くの参加者は帰るために立去ったが、居のこつた四百人ほどは相かわらずワイワイやっていた。警官ともなじみになつてフットボールをする者もあった。

その後「現場から彼らのすべてを立退かせよ」との命令で、朝早く千人の機動隊がやつてきた。機動隊はまだねているキャンパーたちをたたきおこし、バスに詰めこんで数マイル先へと放り出したのである。だがデモの影運はひろがつていた。周辺地の労力はすべてといつてよいほどストリップし、町議会では数千人の委員が対策委員会を原形反対の投票をした。

三日後になると、五千人のキャンパーたちが原発用地に戻ってきた。警官隊は、彼らが現地にどまることを許さねばならなかった。しかしキャンパーたちがおちつき、夜になつて現地住民たちが帰定したあとで警官は再び催涙ガス攻撃をはじめた。彼らは人々におそいばかり五十人に負傷させた。にもかかわらず、キャンパーたちを完全に追い出すことができなかった。そして五千の機動隊がやつてきて有刺鉄線、警棒、催涙ガス、放水、馬をつかつて追拂うまで、彼らはそ

こにいまりつづけたのである。

原発用地の要塞化

大衆のデモや、現地または周辺を会場としてのフェスティバル、とくに占拠が大きくならにつれ、政府は警察の動員とその時間的維持などでは、十分ではないと考えるようになった。

ブロックドルフⅠ、マルヴィルⅡ（*ⅠⅡは占拠の一回目と二回目の意味）の後、原発用地は、それぞれ百万ドル以上をかけた要塞化の方策がとられた。ブロックドルフは、まず水をたたえた壕によつてかままれ、つぎに大量の有刺鉄線と、鋼鉄製のフェンスによつて、さらに厚さ10センチのコンクリート壁で、侵入者を防ぐようになった。同様の要塞はマルヴィルにもグロンドヒーでもつくられた。

これらの要塞化に対してブロックドルフⅡは、どうにかして壕の内側へ突入しようとしたが、二万人のデモ隊のうち誰一人として、そのなかへ入る事ができなかった。

警察はヘリコプターを使用し、催涙ガスを落した。これを予期したデモ隊は「タコ」をたくさくあげて、上空に並よらせず、ガスは速く落ちたのでデモ隊には影響がなかった。しかし占拠できぬこと

にいらだつた人々たちによつて、人投石という思ひぬ事態がおこり、数時間後には二三百人が逮捕されるといふ結果がくることになった。

ブロックドルフの結果、政府は七年二月一九日に計画されていた、デモその他を禁止した。そのためそれに代つて近くの州都であるイツエンホーでのデモを主張する幾つかのグループと、あくまでブロックドルフへ戻ろうというグループとが、運動として分離することとなつた。結果として約二万人がイツエンホーへ行き、二万人がブロックドルフへ向つた。ブロックドルフへ向つた人々は、自動小銃で武装した警官隊の、現地から一マイル以上はなれたところにはられた警戒線におしとめられ、それ以上に誰も一步も前へすゝめなかつた。

市民戦争の問題

一方、同じ日に、政府に知られることなく千人の人たちがグロンドヘーへの行進をはじめていた。そして二時間にもわたつて原発用地に入り、占拠した。そこは二週後に予定されたデモに対して要塞化がすゝめられていたのである。

グロンドヘーは、二万人の行進ではじまつた。

五千人の警官によつて、一マイルはなれたところにつ

くられた防壁線は、やがて突破され、ついで用地を守る最後のバリケード、コンクリートの二重壁に三十フィートの突入口がつけられた。もちろん内側から、放水銃や警察犬、馬、コン棒などの攻撃をうけながら。

デモ隊は、鉄線や壁をこわすための道具は用意していたが、身を守るもの以外、攻撃的にもなる武器は一切もたないことになっていた。直接行動が本来非暴力を意味するものであることによつて、建造物や施設は容赦なく破壊しても、生物に対してはどのような物理力も使わないものである。しかし、まもなくデモ隊の列はくずれ、警官は容赦なく人々をうちのめした。多くのものは、それに耐えあへず逃げ出したが、八百人の参加者が負傷し、三六人が逮捕された。警官側も二七人が負傷したと伝えられ、逮捕者のうち四人が起訴されるに至つた。この起訴された人たちはK.B.W.(西独共産主義同盟)に属し、罪名は殺人未遂である。それは一種の市民戦争の観を呈するものといつても決して誇張ではない。そして結果としてそれは権力を有する者には

集団被逮捕の戦術

シーブロックでの占拠は、原発反対の直接行動

キャンペーンに、新しい要素をつけくわえるものであった。すなわち「集団逮捕」である。

シーブルックでの占拠までは、三百人以上の者がまとまって集団逮捕されることはなかった。しかもそれらは市民的不服従を意識して実行したからでなく、多くは市民的騒動の結果から出た突発事故としてであった。

四月三日日シーブルックでの一四一四人の逮捕は、予め計画され覚悟されての、非暴力的市民法違反から起るべくして起されたのである。

組織化と連合の問題

米国と異なり、ヨーロッパの運動は、はつきりとした成功をおさめている。すなわち「占拠」によつて、ヴァイルやマルコスハイムの原案計画を、また八千人の行進の後モントルトの原案を、とりやめさせた。

そして活動者たちは直ちに、さらに大衆デモを動員できる状態にある。その状況からすれば米国よりヨーロッパの方がより普遍化しているようだ。

しかしまた多数の人々がデモに出るといふことでの向確は、まだ多くのこざれている。

反原発大衆行動のなかで、その組織者たちが、途中で計画の変更や連絡が充分に伝達できないとか、ある

いは流言、または小さな代表的でないグループなど、運動のもつ意図や目的、方針の非暴力的性格をかえ、全体の行動を支配するような状況をつくらうとする—というような状況が、しばしば起つてくる。またあるデモにおいては、何が起つているか誰も知らず、全体のうごきについての、意図決定の役割に、自分が参加していると感づいている者がほとんどいない—ということがある。

また、占拠に参加しながらも、かなりの人々はその行動の意味—非暴力直接行動—それは単なる象徴とみなされている—にも、逮捕を甘受して非暴力的抵抗を一切排することにも興味をもたない—ということがある。

その人達の多くは、占拠を資本主義打倒のための階級戦争の一部と考えているのであり、原案はいま資本家と国家の管理下であり、人民の利益のために増強されていない故に反対しているわけである。また資本主義国家は社会主義国家ほどに安全に留意していないから反対—というわけである。

シーブルック行動の組織化は、それらの問題に対して、不十分なが解決を見出そうというものであった。それは「Ethical Non-Violence」の「親和力あるグループ」とよばれる8520のユニットに

もとづいていた。各グループは非暴力直接行動のトレーニングをすでにうけており、いったん行動がはじまると、グループのスポークスパーソン(代弁者)を通じて意志伝達しあえる、意志決定機構をつくつていた。この機構はデモ戦線の明確な理解を保証するだけでなく、参加者各人に、決定に参加する方法を与えたのである。そして原発賛成派や権力側が、占拠行動に対して暴力のレツテルをはり、またそれをより明らかにおしつけようとする挑発的企てになし、非暴力直接行動を保持しつづけるキイとなつた。

だから、シーブルックⅢの主な問題点

- ① 全員がまだその意志決定機構に充ちなれていず、そのためささいな突発事件で、しばしばシステムの機能が停滞したりマヒすることが起つたこと。
- ② 逮捕が予定通り、すぐ起らなかった時はどうするか、などの計画がされていなかったこと。
- ③ 非暴力直接行動が、消極的なことなれ主義、妥協的戦術や方法と同義視するような傾向が、なお多くあること。

④ 他の運動の問題や対象との関連性やその連合を見通す政治性—いふならばグローバルな巨視的連帯の意識が、一部のみに欠けていたこと。

⑤ 参加者のなかに「原発建設をやめさせる」—原

発地域内に立ち入ること、占拠すること、自分の意志を断固として表示し、抵抗する—といった具体的な立場をまじめに考えるというよりも、むしろ行動を象徴(シンボル)としてみる—たとえ抽象的な生き方、くらし方、生活のたのしみなどの問題にばくぜんと拡大して—の傾向があつたこと。へんが一つとしてとらえられねば、斗いは継続、発展しない。

これからの対応

私たちは、ヨーロッパ・アメリカの両運動は相互に他方の経験から多くのことを学ぶことができるだろう。

ヨーロッパの運動が、今後、原発用地の要塞化のさらなる強化を考慮の上で、成功を求めるのなら、突入して行動隊と叩くより、その通路や入口を封鎖し、非暴力的に逮捕される可能性がある戦術を受入れる必要があるだろう。また参加大衆と行動中心者との離隔をさけるために、参加者に応答することができる意志決定機構を發展工夫する必要があるだろう。

アメリカの反原発運動は、社会競争につながるあらゆる団体と積極的に連繫をとり、種々の辛象雨の相溶性、互助性をよりはっきりと表明する必要があるだろう。もしシーブルックⅢと同じ、ある

いは、もつと大規模な占拠がひんぱんに起ることに
なれば、政府は逮捕することをやめ、ヨーロッパと同様
に、催涙ガス、放水銃、警察太その他の武器による
暴力的攻撃をやり出すにちがいない。その時の封鎖戦
術への展開をもふくめて、どのように新しい対応を創
造するか―それはまさに権力とのちこそくらべである。
だが、まちがっても暴力くらべではない。

WRL News 201 July-Aug 1977 より訳出
筆者 Ed Ederman は、今夏の平和行進に來
日・アメリカ WRL へ戦争被害者リーグの公式代表と
して原水禁大会参加後、大阪 WRL 事務所に滞在し
た。WRL ニューヨーク事務所のナショナル・スタッフ
である。

(訳 岡本 栄)



いこまれてしまう。この状況は、どうしたら打破れるだろうか。すくなくとも今迄のような運動形態や組
織が大きく内面からかわらねばダメだということだけは確言できる。

④ ウリ事務所で話合つたエドたちは去つた。『集つた人達の党派的、政治的な立場は問題にしない。現場
では、みんなが個人として生活者としてうごく。その立前で共同の行動をとるものは、なかまたち。もつとも
権力のスパイなども入りこむことはある。だがそれをもふくめ、誰が何をしても斗えるという斗い方と場を
つくつていく以外、権力の弾圧を無力にし、それに克つことはできない』 例え、三里塚でそれを直ちに適
用できないとしても、このような方向以外に、勝つことがあるだろうか。

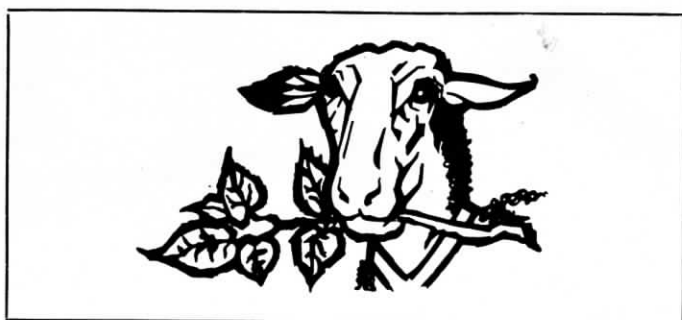
(孝)

あとがき代りに

④ ここに収載した三つの文章を、まずぜひよんで
ほしい―というおもいから、これをつくつた。

④ もしあなたに、この世の中のうごきについて、
単に傍観者だけにとどまつておれない、というおも
いがすこしでもあるなら、大衆行動について見えて
くるものがある―とおもう。だがまた――

④ いま、いろいろな運動が、各地でばらばらにそれ
ぞれの形態と組織がえらばれて行われているのは、
改米だけでなく日本も同じである。が本誌に報じら
れたように、(党派や政党の競合的集結でなく)、今
日こそ、明日はどこというふうに、何かことが起る
と、殆ど無縁にみえた人たちがどつとあつまつてく
るといふ連帯、または連合意識は、まだ日本にはな
い。日本では個人でぼつんといつて集団にとけこめ
る状況は、まづない。グループに入れば党派にかこ



WRI-JAPAN.1977

直接行動 特別号

定 価 150 円 (送 共 200 円)

直接行動 特別号 1977年11月
〈 反原発運動における直接行動の展開 〉

発 行 戦争抵抗者インターナショナル日本部
事務所 大阪市阿倍野区旭町2-12-2 WRI